

第Ⅲ部

態(ヴォイス)

第12章では

- 12.1 で「態」を定義し、
- 12.2 で 使役態の構造、
- 12.3 で 受動態の構造、
- 12.4 で 許容態の構造について述べ、
- 12.5 及び 12.6 で 態における基を説明する。
- 12.7 では 古典語の「尊敬」の構造に少し触れる。

第12章

態(ヴォイス)

12.1 「態」の定義

「態」とは、ある主体Aと属性Zが結びつくことに対して、別の実体Bが特定の意味関係(態属性・T)を保って関わりをもつことをいう。

属性Zは実体Bと直接関わる場合(図12-1)と、関わらない場合(図12-2)とがある。

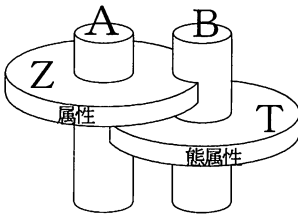


図12-1

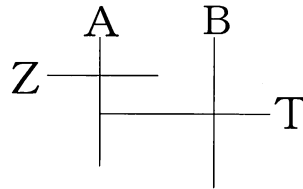


図12-2

特定の意味関係(態・T)には、基本的に表12-1に示す3種類のものがある。

表12-1

(3種類の態)

使役態	主体Aと属性Zが結びつくことの原因が実体Bである。 態属性は -(s)as- (s)は、母音に続くときに出現する。
受動態	主体Aと属性Zが結びついた影響を実体Bが受ける。 態属性は -(r)ar- (r)は、母音に続くときに出現する。
許容態	主体Aと属性Zが結びつくことを実体Bが許容する。 態属性は -e-

『日本語構造伝達文法 発展B』では使役態、受動態をそれぞれ原因態、受

影態と呼び、さらに詳細に検討することになる。

表12-1 中の3種類の態を、それぞれもう少し詳しくみてみたい¹。

12.2 使役態……「動作使役態」と「意志使役態」がある

「動作使役態」は被使役主体(A)の意思のあり方にかかわらず、使役主体(B)が被使役主体(A)とその属性(Z)の結合を強いるものであり、「意志使役態」は被使役主体(A)の意志を介してその結合を強いるものである。

また、この両者には、被使役主体(A)と態属性(T)の格関係に関して相違がみられ、前者では「を格」、後者では「に格」となる。

「動作使役態」

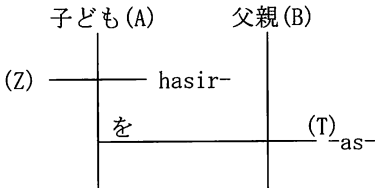


図12-3 父親が子どもを hasir-as-

「意志使役態」(意志動詞使用)

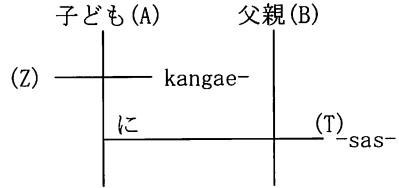


図12-4 父親が子どもに kangae-sas-

3実体に関わる意志使役態の一例を示しておく。

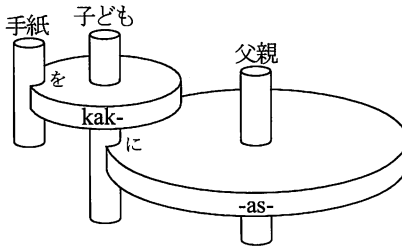


図12-5 父親が子どもに手紙を kak-as-

*1 日本語の -(s)as- に当たるものは、モンゴル語では -uul- や -lga-, トルコ語では -dir-, 韓国語では -i- や -hi- などである。-(r)ar- に当たるものは、順に -gd-, -nil-, -i- や -hi- など、である。

12.3 受動態……「直接受動態」と「間接受動態」がある

「直接受動態」では、属性の客体になっている実体が受動態属性-(r)ar-の主体となり(図12-6, -8), 「間接受動態」では、属性の客体になっていない実体が受動態属性-(r)ar-の主体となる(図12-7, -9)。後者は「迷惑の受身」と呼ばれ、日本語特有の受動態であるといわれている^{*1}。

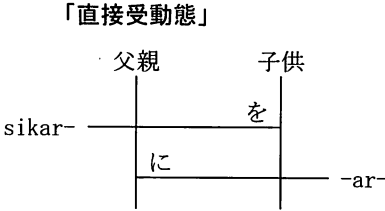


図12-6 子供が父親にsikar-ar-

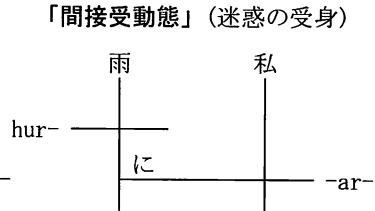


図12-7 私₀₁(は)雨にhur-ar-



図12-8 塀がtukur-ar-

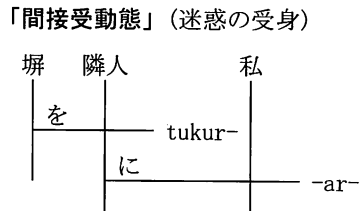


図12-9 塀をtukur-ar-(迷惑)

「塀が作られた」では迷惑ではないのに、なぜ「塀が」の「が」を「を」にしただけで迷惑に変わるのか、という疑問がある。この疑問に答えるには、このような二つの図を示せばよいであろう。

なお、「隣人によって塀が作られる」のような「～によって～られる」の形式については12.6で扱う。

また、「準直接受動態」(持ち主の受身)と呼ばれるものもある。構造は図12-10, -11のように示すことができる。

*1 迷惑の受身は、西欧語にはないといわれる。また、韓国語にもない。

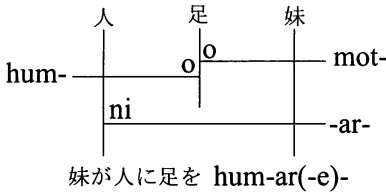


図12-10

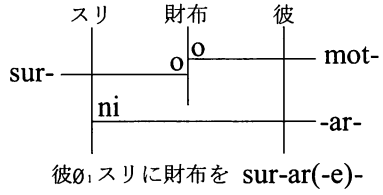


図12-11

◎ 語中の受動態

一語とみなされる形態の中にも受動態が入っている場合がある。その場合、「分かる」のように態属性 $-ar-$ の主体が動属性の客体になっているとき、属性と態属性の一体化が生じて同一属性に2主体が立つ形になることがある(図12-12, -13)。その場合は「彼が英語が〜」のように二重主語となる。(二重主語については第VII部で扱う。)

「分かる」の中の受動態



図12-12 英語が彼に wak-ar-

彼は英語が wak-ar-

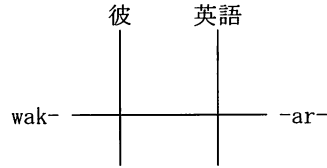


図12-13 彼が英語が wak-ar-

英語が彼は wak-ar-

彼は英語を wak-ar- (属性一体化中間形態)

wak- は古語で「相違を見て明確に区別する意」(『岩波古語辞典』)

12.4 許容態……「対他許容態」と「対自許容態」がある

『日本語構造伝達文法 発展B』において、許容態 $-e-$ 、原因態+許容態 $-(s)as-e-$ についてさらに詳しく扱う予定である。

12.4.1 対他許容態……許容主体と被許容主体が異なる。

①対他許容態の1) 属性が -e- の主体を客体としない場合…「能動」「可能」

[能動] (許容者が積極的に関わる。使役態に近い。)

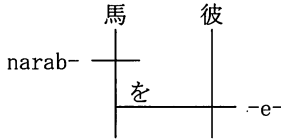


図12-14 彼₀は馬を narab-e- (並べる)

[可能] (許容者が状況など、漠然としたもの。英語であれば it で表すようなところだろうか。属性が一体化する。)

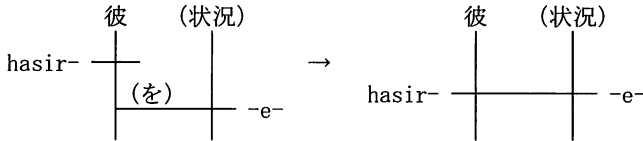


図12-15 彼₀は hasir-e- (走れる)

図12-16

②対他許容態の2) 属性が -e- の主体を客体とする場合…「可能」「自然発生」

[可能] (属性の主体が有情物で有意志のとき。属性一体化。)

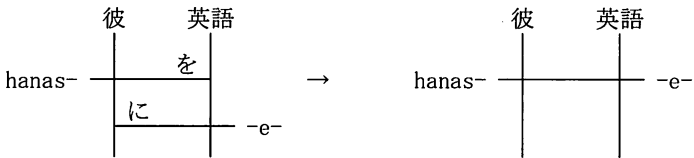


図12-17 彼に英語が hanas-e- (話せる)

図12-18 彼が英語が hanas-e-

彼が英語を hanas-e- (属性一体化中間形態)

[自然発生] (属性の主体が非情物あるいは状況などのとき)

(属性の主体が有情物でも無意志で、状況に重点を置くとき)

図12-19、-20では、表層文で「枝が揺れる」「歯が抜ける」という表現になる。yur-, nuk- の主体は主語にならない。図12-21、-22では「富士山」「(あの)映画」が(有情物)主体にその属性との結合を許容して

いるので、表層文の主語は「富士山」「映画」の方である。しかし、有情物が主語となる可能性もある(属性一体化)。

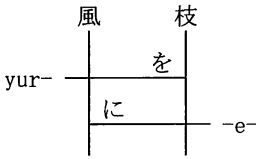


図12-19 風に枝が yur-e-
(揺れる)

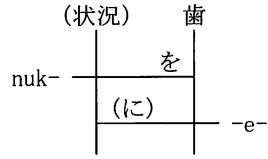


図12-20 歯が nuk-e-
(抜ける)

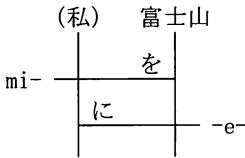


図12-21 富士山が mi-e-
(見える)

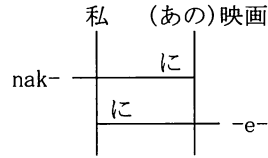


図12-22 (あの)映画が nak-e-
(泣ける)

12.4.2 対自許容態……許容主体と被許容主体が同じなので、ギリシア語のように「中動態」と言ってよいかもしれない。
属性・主体の一体化が起こる。

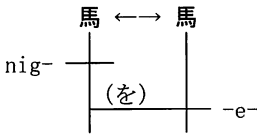


図12-23 馬が nig-e-
(逃げる)

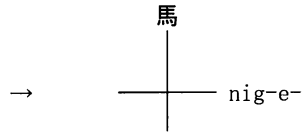


図12-24 (属性・主体一体化)
(参考：nig-as-)

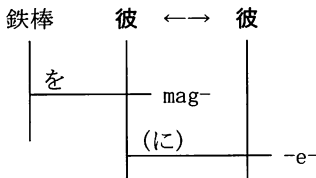


図12-25 彼の鉄棒を mag-e-
(曲げる)

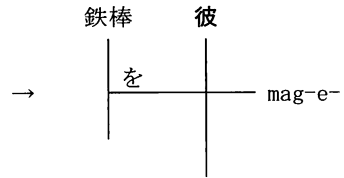


図12-26 (属性・主体一体化)
(参考：mag-ar-)

12.5 基……基とは、詞(5.1参照)がいくつか集まって一つのまとまりをなし、全体として一定の形式と意味を保つものであり、次のものが認められる。

使役受動基以下には、このほかにもバリエーションが若干ある。

なお、ここでは「基」は「態」と言い換えてもよい(例：使役受動態)。

- 1) 使役基 - (s)as-e-
- 2) 受動基 A - (r)ar-e-
- 3) 受動基 B - (r)ar-e-
- 4) 使役受動基 - (s)as-ar-e- / - (s)as-e-rar-e-
- 5) 二重使役基 - (s)as-as-e- / - (s)as-e-sas-e-
- 6) 二重使役受動基 - (s)as-e-sas-e-rar-e-

1) 使役基



図12-27 父親の₁は娘に事実を sirabe-sas-e- (調べさせる)

通常は -sas-e- の部分を一体化して、図12-28のように構造図示する。

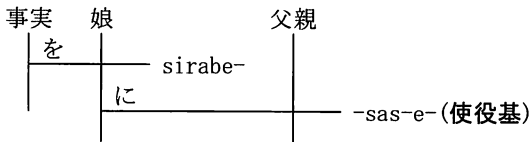


図12-28 父親の₁は娘に事実を sirabe-sas-e- (調べさせる)

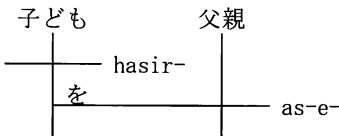


図12-29 hasir-as-e-

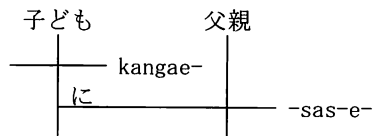
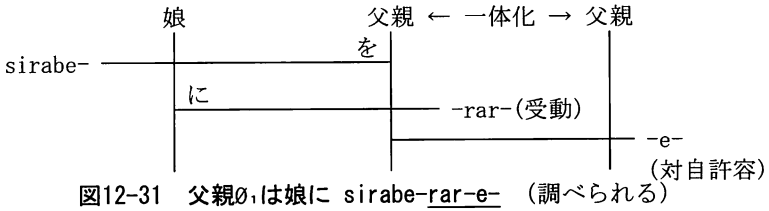
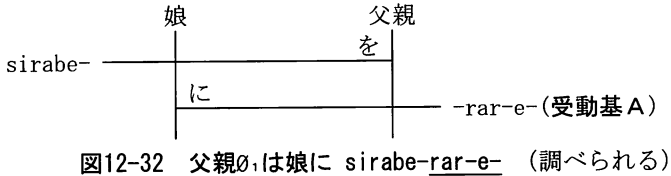


図12-30 kangae-sas-e-

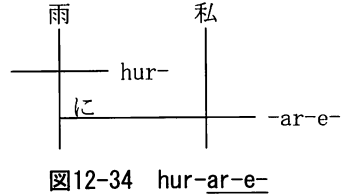
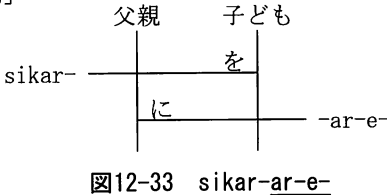
2) 受動基A…… [受動] [自発] の意味になる。



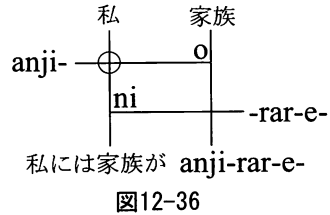
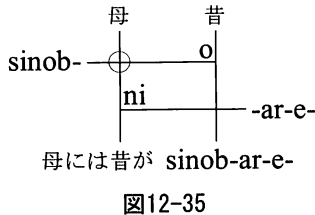
通常は -rar-e- の部分を一体化して、図12-32のように構造図示する。



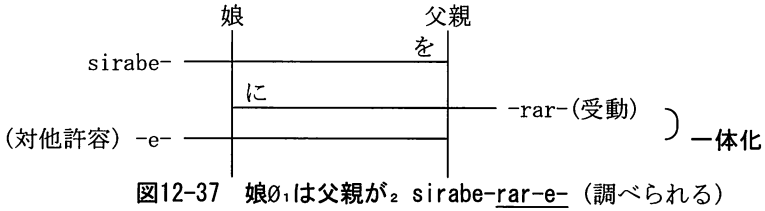
[受動]



[自発] ……属性が「考える kangae-」「思う omo(w)-」「恨む uram-」「偲ぶ sinob-」などの、心の動きや感覚を表現するものときには、[自発]となる。「～には～が～れる」の形で描写されることが多い。



3) 受動基B…… [可能] [尊敬] の意味になる。-(r)ar- と -e- は一体化。



[可能]



「娘」が「父親がsirabe-rar-」を許容する、という構造意味がある。

- ① 娘₁は父親を sirabe-rar-e-
- ② 娘₁は父親が₂ sirabe-rar-e- (二重主語)
- ③ 娘には父親が₂ sirabe-rar-e-
- ④ 父親₁は娘に sirabe-rar-e-

④の例文「父親₁は娘に sirabe-rar-e-」は[受動]の表層文でもありうる(図12-31, 二義)が、図から分かるように構造に違いがある。

[可能]の場合には、発音を経済的にするために -rar- の ra を脱落させることがある。いわゆるラ抜きである。ただし、構造形式はそのまま保たれる。

- ⑤ 娘には父親が₂ sirabe-r-e-

なお、書く(kak-)のように(語幹が)子音で終わる動詞は、この形式ではなく、図12-15, -17のような許容態-e-の形式をとることが多い。

もう一つ「可能」の例を示しておく(図12-39, -40)。

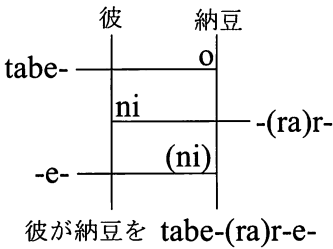


図12-39

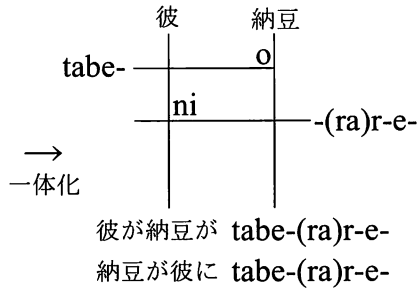


図12-40

[尊敬] …… -(r)ar- の主体が「発話者の意識」であるとき [尊敬] となる。発話者意識が主格で扱われることはあっても、その意識そのものがことばで表現されることはない。

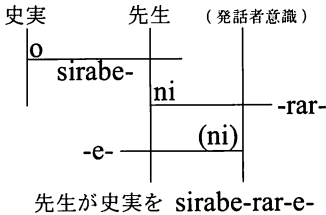


図12-41

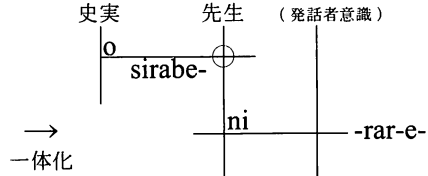


図12-42

4) 使役受動基

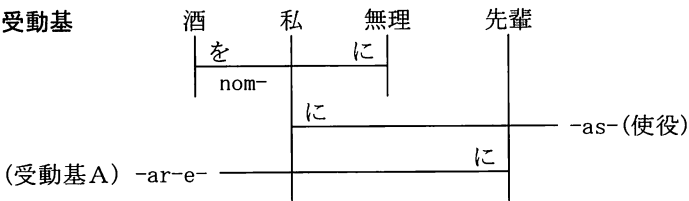


図12-43 私01は無理に酒を nom-as-ar-e-

図中の「無理に」は図12-44の構造のように考えることもできる。

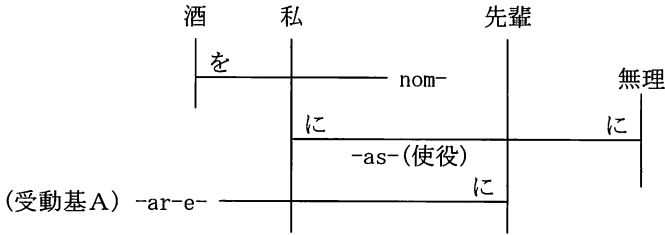


図12-44 私₀は先輩に無理に酒を nom-as-ar-e-

この「無理に」のように、態属性に直接関わる要素もある。

5) 二重使役基

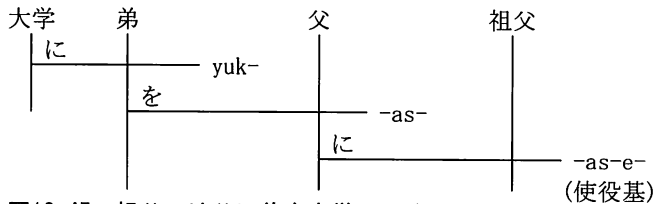


図12-45 祖父₀は父に弟を大学に yuk-as-as-e-

6) 二重使役受動基 (受動と可能)

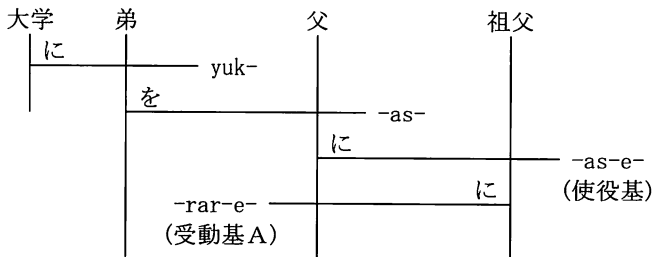


図12-46 父₀は祖父に弟を大学に yuk-as-as-e-rar-e-

最後の -rar-e- の部分が受動基B [可能]の形になる場合もある。

祖父が父に弟を大学に yuk-as-as-e-rar-e- (可能)

12.6 「～によって基・～により基」

なお、受動態では、生産者や原因等を表す動作主体は

-ni=yor-i=te-Ø 「～によって」 (音便についてはA 3章)

-ni=yor-i 「～により」

という基の形式で提示されることが多いが、その場合の構造は図12-47、-48のようになる。

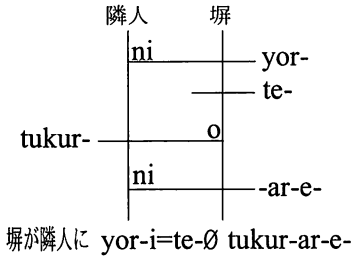


図12-47

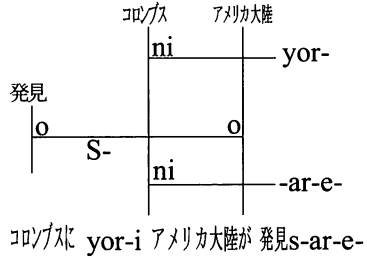


図12-48

ここに使用される「よる」は「そのことに基づく」のが元の意味である。

12.7 「いらっしゃる」……古典語の「尊敬」の構造

先生がこちらにいらっしゃる

の「いらっしゃる」は「いらせらる」の転じた語であるという(『日本文法大辞典』)。であるならば、次のように形態素分析できる。

ir-as-e-rar-u (いらせらる) (ir- は「入る」)

ir-as-e- ar-u

→ ir-as-i-yar-u (いらっしゃる)

すると、この「いらせらる」の構造は図12-49のように示すことができる。

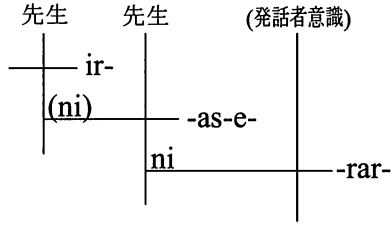


図12-49 先生(に) (は) いらせらる

この構造で特徴的なのは「先生」という同じ主体が二つあることである。これは古典語の尊敬構造の特徴で、対自使役の構造である。高貴な人物は自分で自分を使役するという形式になる。この意味で、-(s)as-形にも中動態が認められることになる(-e-による中動態については12.4.2参照)。

この対自使役(中動態)の考え方は、この文法の主張するところである。従来は、高貴な人物がそば仕えの者を使役する形の表現であると説かれていた(『岩波古語辞典』『助詞助動詞詳説』等)。しかし、そのような扱い方では

人のそしりをもえはばからせ給はず (源氏物語、桐壺)

のような、明らかに当人の気持ちの動きを表す動詞(はばかり)の場合などでも他の人物にそうさせるという不合理なことになってしまう。

なお、図12-49の -(s)as-e-rar- の構造は「しゃる」「さしゃる」の構造でもあり、いわば古典語における「尊敬基」の一つである。

「英語がわかる」は、なぜ「英語が」？ → p. 107

「富士山が見える」は、なぜ「富士山が」？ → p. 108

日本語には中動態がある？ → p. 109 / p. 115

「～られる」は、なぜ受動・自発・可能・尊敬になる？ → p. 111